

都の闇はそばにいる
口を開けても
何も君の前を
照らさないのなら

文明が生み出したもの
高尚な快樂と
指一本の仕事率
そして作り物の夜明け

あおいろ詩繡^{ししゅう}

『生きている蒼い宝石の中で』

白い砂浜に残る小さな足跡 潮風に抱かれる心
きらきらと続くさざ波の音は 蒼い夢の中に溶
けては消えてゆく
瞳に覗いてくる きらきらな蒼は 呼吸している
宝石達

太陽に抱かれて キセキは蒼色に輝き 生きる宝
石となって この星を廻していく
もしかして他に この星が蒼い理由は
僕達の想像や願望を光に照らしたら 蒼かった
からかもしれない

涙の味が広がる蒼い夢
貝がらに隠れてい夢の粒
メッセージを残した砂浜の手紙は さざ波で届け
る一つの気持ち

手にすくって溜めた きらきらな蒼は 生命輝く
宝石達

太陽に抱かれて キセキは蒼色に煌めき
命あふれる宝石となって この星を廻していく
僕達が歩むこの星の足跡は 生きている蒼い宝
石とともに息をしている
一日 一日 生きているんだ

この星の七十の隙間に
太陽の不思議な歌が広がり
キセキは 蒼い夢に産まれてきて
この星を廻している
僕達も生きている

太陽に抱かれて キセキは蒼色に輝き 生きる宝
石となって この星を廻していく

太陽の我がままで キセキは蒼色に輝き 生きる

経済学部
経済学科 3 年

伊藤 洋佑

宝石となって この星を廻していく
蒼い夢とともに この星が廻り 僕達の足跡も
一緒に乗せながら
ともに生きていくんだ

『あおい抱擁』

この体はどこまで泳げますか？ この体はどこまで潜れますか？

この体はどこまで沈められますか？ この体はどこまで息ができますか？

例えば 生きとし生きるものは 蒼い海から零れ産まれてきたのでしょうか

さざ波の船の中 蒼い灯火を握りながら

どこまでも どこまでも 蒼の中を泳いで

どこまでも どこまでも 蒼の中で耳を澄まして 生きとし生きる者の指に 蒼い糸が繋がって

心臓の音色が産声をあげる

この心はどこまで飛べますか？ この心はどこまで羽ばたけますか？

この心はどこまで浮かびますか？ この心はどこまで息ができますか？

例えば 生きとし生きるものは 青い空から生れ落ちてきたのでしょうか

白い雲の殻の間から 青い夢を抱きかかえながら

ここから ここから 青の中を覗いて

ここから ここから 青の中で目を閉じて

空が鳴いて 小さな青い足跡が浮かんで 命が鳴き始める

この体はどこまで息ができますか？ この心はどこまで息ができますか？

交差していく 蒼い想い 青い願い

蒼い青い祈りに優しく抱きしめられながら

どこまでも どこまでも 蒼の中で息をして

どこまでも どこまでも 青の中で息を重ねて

生きとし生きるものの体に 蒼い青い命の輪が一つに融けあつて世界を見る

ここから ここから 蒼の中で声を紡いで

ここから ここから 青の中で声を繋いで

生きとし生きるものに 蒼い青い声が響いて

世界が変わっていく

どこまでも どこまでも 蒼の中で

ここから ここから 青の中で

『Blue spring days』

青春は若い人だけのモノなの？ 時が過ぎたら消えてなくなってしまうモノなの？

いや 違うでしょう

子供も 大人も 老人も 老若男女 誰だって

持っている青い春の物語

今を歩む青い春の物語

これまでいくつの足跡を作ってきましたか？ 青い春の物語にどんなページを描いてきましたか？

過ぎ去った時計の針は巻き戻せないけど

『これから』という光は 0パーセントじゃないから キミだけの青い春の物語を紡いでいこう

いつだって挑戦してきて

いつだってアタックしてきて

いつだって色んな答えを出してきて

ほら 僕達の青い春の物語がまた1ページ

増えて 彩られていく

最期に 命尽きるとき

「最高の青春だった」って 笑って言えるように 青い春の物語を紡いでいこう

「あの頃は良かったなあ」で終わらせてしまうものなの？

『今』ではその青い春の物語がないものなの？

いや まだまだでしょう

早い時計も 遅い時計も 一日一日 いつだって

紡いでいる青い春の物語

今を生きている青い春の物語

どこから何色の欠片を集めてきましたか？

青い春の物語にどんな想いを映してきましたか？

『後ろ』に伸びた影の方向は変えられないけど

『前』に伸びる影の方向は無限大だから

キミだけの蒼い春の物語を繋げていこう

どこまでも駆け抜けてきて

どこまでもダッシュしてきて

どこまでも色んな足跡を残してきて

ほら 僕達の青い春の物語がまた1ページ

重なって 輝きを増す

後悔しないことなんてないけれど

それでも自分が選んだモノを忘れちゃいけないんだ だって それは キミの大切な青い春の物語だから

十人十色の人生があるけれど

青い春は若いときだけの色ではなく 老いている

ときでも色あせない

だって

青い春の物語は今を生きている

その人自身なのだから

いつだって悲しんで泣いて

いつだって傷ついて怒って